様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４４０２０３２

研究課題名（和文）地域ケアにおけるジェンダーの次元とアーティキュレーション・ワークに関する国際比較

研究課題名（英文）Dimension of gender and articulation work in community care, an international comparative study

研究代表者
原山　哲（Harayama, Tetsu）

東洋大学・社会学部・教授

研究者番号：９０１５６５２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、地域ケアの活動、とりわけ看護師のキャリアのジェンダー化された形成の脱構築、そのアーティキュレーション・ワーク（連携と調整）に焦点を置き、2013－2014年、訪問看護師についての調査を、フランスと日本において実施した。
2015年は、国際社会学会で、部会「保健医療プロフェッションと組織」をオーガナイズし、看護師、ソーシャルワーカーなどのアーティキュレーション・ワークについて議論した。福島の復興の事例は、新たな価値、広域化されたネットワークによる新たな形態の家族、地域の形成にかかわる社会ネットワークの構築を示していることが明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：The present study focuses on caring activities in community, especially on the deconstruction of gendered forms of nurses' careers and their articulation work required on the part of various social actors. In 2013-2014, a comparative survey on visiting nurses' work was conducted in France and Japan.
In 2015, the session "Health professions and organization" was organized in the Congress ISA for discussing the question of articulation work by nurses and social workers. The social reconstruction in Fukushima brings new values to the fore, which accentuate developing social networks through the various social actors' articulation work. This means developing new forms of family life and new kinds of local communities, by extending the existing social networks.

研究分野：社会学

キーワード：社会学　ジェンダー　ケア　国際比較　地域

1. 研究開始当初の背景

本研究の開始当初の学術的背景は、P.ブルデュー（P. Bourdieu）の界・領野（champs）についてのポスト構造主義の社会学理論を、多元的な界・領野へと展開することにかかわっていた。この方向での経済社会学の理論展開は、L.ボルタンスキー（L. Boltanski）、L.テヴノ（L.Thevenot）によって（L. Boltanski et E. Chiapello, Le nouvel esprit du capitalisme, 1999）、また、医療社会学では、M.‐C. プシェル(A.-M. Pouchelle)によって（A.-M. Pouchelle, L'hopital et ame, 2003)、 市場競争の界・領野、技術支配の階層組織の界・領野、調整と連携の界・領野といった多元的な界・領野の構成原理をめぐって探究がなされてきた。

この第三の調整と連携は、シンボリック相互作用論の社会学において、A. ストラウス（A. Strauss）が重視した医療組織の構成原理であり、医療サーヴィスの市場競争や、医療技術による医師の支配にたいして、ケアの受け手（患者）を配慮した、ケアの担い手の行為者が参画するアーティキュレーション・ワーク（articulation work）である（A. Strauss et al., Social Organization of Medical Work, 1985; A. Strauss, Continual Permutation of Action, 1993)。

このようなアーティキュレーション・ワークの実現は、ケアの担い手がジェンダー化された医療組織の周辺に位置づけられていては困難である。言い換えれば、ケアの主要な担い手である女性がジェンダー化された雇用の地位を超克し、ワーク・ライフ・バランスとともにキャリアの形成が可能となることが前提となるであろう。

そこで、本研究の研究代表者・原山哲は、平成 21 年度～23 年度・科学研究費・挑戦的萌芽研究「ブルデューの界・領野の理論の展開と労働における社会的承認の日仏比較研究」（研究代表者：原山哲）において、雇用のフレキシビリティと労働におけるネットワークの重要性を析出するとともに、多元的な界・領野についての理論に基づいて、フランス・労働社会学研究所(LEST, Laboratoire d'Economie et de Sociologie du Travail)の協力による国際比較研究の準備をおこなった。

２．研究の目的

本研究では、その目的を、主としてフランスと日本における国際比較に絞り、次の四つのリージョンでの地域ケアについての調査を実施することとした。すなわち、フランスでは、高齢化が進んでいない北フランス、高齢化が進んだ南フランスであり、日本では、地域ケアが先進的に試みられてきた長野県、地域ケアの再構築が課題とされている東日本大震災後の福島県である。本研究では、地域ケアの基軸としての訪問看護に焦点をおいて、次の主要な二点について明らかにするために調査を実施した。

第一に、ケアの主要な担い手である女性がジェンダー化された雇用の地位を超克し、ワーク・ライフ・バランスとともにキャリアの形成が可能となっているか、仏、日の四リージョンでの訪問看護ステーションを中心に国際比較をおこなった。とりわけ、労働時間、交代勤務のプランニング、保育所などの福利厚生だけでなく、さらに継続教育によるコンピタンシーの構築について、国際比較の視点から明らかにしようとした。

第二に、医療機関によるケア・サーヴィスの市場競争や、医師による医療技術の適用だけでなく、ケアの受け手（患者）を配慮した（患者のアドヴィカシー)、ケアの担い手の行為者が参画するアーティキュレーション・ワーク（調整と連携）について、訪問看護師の果たす役割を基軸に、国際比較から明らかにしようとした。そこで、訪問看護が、入院医療、在宅医療、福祉サーヴィスなどとともに、どのようなアーティキュレーション・ワークを実現しているか国際比較調査をおこなった。

以上の国際比較の主要な二点は、相互に関連していると想定された。

本研究は、地域ケアの再構築としての訪問看護に焦点をおいて、そのジェンダー化された雇用の地位とアーティキュレーション・ワーク（調整と連携）について、フランスと日本との国際比較をすることを目的としている。すなわち、ケアの担い手の地位と組織について、次の相互関連する二つの傾向に留意している。１）ケアの担い手の雇用の地位がジェンダーを脱構築したキャリア形成へと進展し、２）それとともに、ケアの組織が、医療機関、福祉施設、家族などの間のアーティキュレーションへと拡大しつつある。本研究は、フランスを一例とする西ヨーロッパにおいては病院依存ではなく訪問看護が顕著であること、他方、医療機関の空白地域である東日本大震災後の東北地方でも訪問看護が重視されていることに留意し、国際比較によって有効な施策を探求しようと試みた。

３．研究の方法

本研究は、平成 24 年度～26 年度の 3 年間での実施を計画し、平成 24 年度は、4 月～11 月に、研究代表者・原山哲、および研究分担者が、医療機関の空白地域である東日本震災以後の東北地方、および在宅医療が多い長野県において、訪問看護師を中心にインタヴューと質問票の方法によって調査を実施した。質問票は、雇用のトラジェクトリーの形成と労働の組織の構築とに焦点をおいた質問からなり、自由記述の回答に質的分析をすることとした。

他方、平成 24 年 4 月～11 月、フランス側の研究協力者である M.ブーロンニュ・ガルサン（M. Boulongne-Garcin）（フランス・ピカルディー地方保健機構予防委員会(ARS de

Picardie)、P.モッセ（P. Mosse）（フランス・労働経済社会学研究所（LEST））を中心に、日本での調査と同様に、北フランス、南フランスにおける訪問看護師へのインタヴュー、質問票の方法による調査を実施した。それとともに、9 月、研究代表者・原山哲が、P.モッセと、フランス・労働経済社会学研究所において、日仏比較研究の調整をおこない、国際比較調査研究実施の全体の枠組みを確認した。

また、P.モッセを中心に、フランス・労働経済社会学研究所（LEST）の主催（国際交流基金の助成）により、医療プロフェッションについての日仏ワークショップ（平成 24 年年 11 月、平成 25 年 3 月）「地域ケアにおけるジェンダーの次元とアーティキュレーション・ワークの国際比較」（Dimension of Gender and Articulation Work in Community Care; An International Comparison）が開催され、原山哲（平成 24 年 11 月、平成 25 年 3 月参加）が地域ケアの調査結果について報告した。さらに、日本の参加者から、災害看護の観点からの日本の被災地の地域ケアの状況について報告がなされ、それとともに、フランスと日本との在宅看護の国際比較について、その制度の差異について議論し、調査結果の分析の主要な点について検討した。

なお、このワークショップには、11 月、3 月、フランス側から、P.モッセ、M.ブーロンニュ・ガルサンほか、A.-M.アルボリオ（A.-M. Arborio）,（フランス・労働経済社会学研究所・研究員、著書に、ケアの担い手のジェンダー化されたキャリアの脱構築について論じた A.-M. Arborio, Un personnel invisible, 2002）が参加した。また、V.ロジャーズ(V. Rogers) （イギリス・エジンバラ大学、共著に P. Mosse and T. Harayama (eds), Hospitals and the Nursing Profession, Lessons from Franco-Japanese Comparisons, 2011）が参加した。

平成 25 年度は、平成 24 年度に実施したインタヴュー、質問票よる調査の結果の分析を進めるとともに、6 月、原山哲、朝倉京子が、M.ブーロンニュ・ガルサンの協力により、北フランスの地域ケアについて、施設見学とあわせて、訪問看護師とのインタヴューを実施した。

並行して、地域ケアにおける広域ネットワークの可能性について考察するために、研究分担者・青木辰司は、8 月、災害への対応とネットワークとの関連について、イギリス・イングランドのグリーンツーリズムの協会を訪問し、グリーンツーリズムによって形成された援助のネットワークの重要性をめぐってインタヴュー調査を実施した。

最終年度の平成 26 年度は、フランス側の研究協力者、P.モッセとともに、これまでの調査の結果の分析、考察を進めた。そのために、7 月横浜で開催された国際社会学会（ISA）で、原山哲は P.モッセとともに、部会（Health Professions and organizations, Issues of International Comparisons）をオーガナイズし、また、フランスのケアの倫理の研究を専門とする F.ブルジェール（F.Brugere）（パリ第 8 大学）を招へいし、議論を深めた。この議論を踏まえて、原山哲は、P.モッセ、M.ブーロンニュ・ガルサンとともに、フランス語論文（《 Les espaces professionels des infirmieres en France et au Japon, elements pour une lecture conventionnaliste 》, RFAS, 4-2014）を執筆した。

さらに、研究分担者・西野理子は、10 月、フランス・パリでの複数の家族の事例を対象とするインタヴュー調査を実施し、育児、介護のケアの問題への家族の関与について、日本との比較から考察した。

また、これまでの研究成果を集約するため、平成 27 年 3 月、F.ブルジェールとともに、脆弱性の社会的包摂について研究している G.ルブラン（G. Le Blanc）（ボルドー大学・哲学教授）を招へいし、地域ケアについてのセミナー、講演会を開催した。

４．研究成果

本研究の学術的特色・独創的な点は、ケアの担い手のジェンダー化された雇用の地位の超克と、ケアの担い手の行為者が参画するアーティキュレーション・ワーク（調整と連携）との関連に留意することにある。それは、また、上野千鶴子の提唱するケアの「協」の組織形態と対応すると言えよう（上野千鶴子『ケアの社会学』2011）。

ヨーロッパとの国際比較の視点からみると、日本の地域ケアの状況は、病院中心であり、在宅ケアの発展は、なお今後の発展に期待せざるを得ないだろう。すなわち、人口 1000 人あたりの病院のベッド数は、フランス７に対し、日本１４である（2011、OECD）。そして、在宅ケアにかかわる訪問看護師は、人口 10 万人あたり、フランス 87 に対し、日本 24 である（2010、DREES、MHLW）。他方、65 歳以上の高齢者が一人世帯である比率は、フランス１７％に対し、日本 39%である。言いかえれば、日本の在宅ケアは、今なお、家族自身による私的なケアに依存していると言える。

第一に、ケアの担い手の雇用の地位がジェンダーを脱構築したキャリア形成へと進展しているか、調査結果からみると、フランス、日本ともに、在宅ケアの以前に病院勤務を経験しており、看護師としての経験年数が長い。また、フランス、日本ともに、ほとんどの看護師が結婚して子供がいる。しかし、フランスの看護師が、病院勤務から在宅ケアとの間に中断がないのに対し、日本の看護師は大半が 10 年以上の中断がある。出産、育児の時期に看護師としての職業活動を中断すると

いう事情は、看護師がジェンダー化された地位に拘束されていると言えるだろう。

在宅ケアにかかわる訪問看護師の職業活動を選択した理由（自由記述の回答）は、フランスの看護師の場合、「病院組織からの自由」「患者との関係」が多く見いだされるが、これは、日本の看護師の場合でも同様であり、「在宅ケアへの関心」「患者との関係」という記述が多い。すなわち、病院の技術支配とは異なる「ケア」、患者との関係に価値を求めている。しかし、フランスの在宅ケアの看護師の収入は、病院勤務に比べると倍であり、「収入」も選択の理由として挙げられていることが留意されよう。

そこで、第二に、ケアの組織が、医療機関、福祉施設、家庭などの間のアーティキュレーションへと拡大しつつあるか、調査結果における自由記述回答をみれば、フランスと日本との比較することで、多元的な界・領野の構成原理の問題が、いっそう明らかになる。

在宅ケアにおける、やりがい（motivation）、難しさ（difficulty）については、フランスの看護師の場合、また日本の看護師の場合、ともに、「患者との関係」「ケアの結果」という記述がみられる。

しかし、日本の看護師の大半において、「患者との関係」における「家族との関係」が含まれている記述が見いだされる。これは、日本の在宅ケアが、家族の私的なケアに依存しており、看護師のケアも、家族の協力を不可欠としているからであると推察できよう。

とりわけ福島県の場合、在宅ケアにおいても、家族のケアへの依存を軽減するためにも、患者の一時的な滞在施設を、訪問看護ステーションに設置する要請が、自由記述において見いだされた。

さらに、職業活動の将来、国の政策についての問いには、フランスの看護師の場合、個人の自由開業の訪問看護師以外に、病院付属、アソシエーションなどの在宅ケアが増加し、「競合」への不安が表明されている。日本の看護師の場合、フランスとは反対に、とりわけ福島県では、地域ケアのニードに対応するための看護師の人員不足が問題として認識されている。

それゆえ、フランスと日本との国際比較においては、医療技術の適用重視の次元とともに、家族の協力による私的ケアの次元を加えて考察する必要が明らかになった。言い換えれば、女性が職業活動においてジェンダー化された拘束から自由になることは、女性が家族の私的ケアから解放されることと表裏一体のことではないだろうか。調査の結果の分析から、フランスと日本との国際比較は、次の表（フランスと日本とにおけるケアの次元）のように要約されるだろう。フランスと日本とは、技術支配からの自由は共通しているが、家族の協力の必要、市場競争においては対照的である。このような異なる状況から、地域ケアにおいて、アーアーティキュレーション・ワークをとおしてのネットワークの形成は、やはり、共通に要請されていると言える。

フランスと日本におけるケアの次元

	フランス	日本
技術支配からの自由	＋	＋
家族の協力の必要	－	＋
市場競争	＋	－
アーティキュレーション	＋ －	＋ －

このような調査結果の分析と考察は、平成26年度7月の国際社会学会（ISA）において研究報告されるとともに、フランス語論文にまとめられ、フランスの学術誌に掲載された（《Les espaces professionnels des infirmieres en France et au Japon, elements pour une lecture conventionaliste》, in RFAS、No.4－2014）。

ケアにおけるアーティキュレーション・ワークによるネットワーク形成は、F.ブルジェールの提唱する「ケアの倫理」の次元であり、フランスと日本との国際比較研究は、今後、F.ブルジェールを研究協力者に加えて、進展することが考えられよう。すなわち、ブルジェールによれば、女性の家族における私的なケアからの解放は、ケアを、私的であるとともに、公的でもあるとし、女性が、男性とともに、「個人」として承認されることになると考えられる。（F. Brugere, La politique de l’individu, 2013）。このような「個人」の個別性（singurality）の承認に依拠する社会の構想の指摘は、ジェンダーの次元の考察にとって重要となるだろう。

また、P.モッセは、以上の考察について、平成27年6月、ストラスブールでの日本学術振興会による日仏合同フォーラム「イノベーションと変貌する世界の課題」（France-Japan Joint Forum, Innovation and the Challenges of the World in Transition, MISHA）において、“Innovation in health care systems”について報告する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１　件）

① Philippe Mosse, Tetsu Harayama and Maryse Boulongne-Garcin, 《Les espaces professionnels des infirmieres en France et au Japon, え elements pour une lecture conventionaliste》, in Revue francaise des affaires sociales 査読有 No.4-2014 septembre-decembre, pp.139-156.

URL:http://www.cairn.info/revue-francaise-des-affaires-sociales.htm

〔学会発表〕（計　４　件）

① Tetsu Harayama et al., “ Worlds of nurses in the care at home, a comparison in France and Japan”, the session “Health professions and organization, issues of international comparison”, the congress of the International Sociological Association, July 17 2014, Pacifico Yokohama, Yokohama.

② Philippe Mosse, Maryse Boulongne-Garcin, Tetsu Harayama and Kyoko Asakura, 《Les mondes des infirmieres a domicile en France et au Japon》, le seminaire “Sociology of Work”, le 20 septembre 2013, LEST, Aix-en-Provence, France. （招待講演）

③ Tetsu Harayama and Kyoko Asakura et al., 《Les infirmieres visiteuses a l’Est du Japon》, le seminaire《Les professions de sante dans une perspective franco-japonaise :une Convention emergente?》, le 28 mars 2013, LEST, Aix-en-Provence, France. （招待講演）

④ Tetsu Harayama, 《Les infirmieres visiteuses a l’Est du Japon》, l’atelier franco-japonais, le 5 novembre 2012, LEST, Aix-en-Provence, France. （招待講演）

〔図書〕（計　１　件）

① ファビエンヌ・ブルジェール著、原山哲、山下りえ子訳『ケアの倫理－ネオリベラリズムへの反論』白水社クセジュ文庫、2014年1月
(Fabienne Brugere, L’ethique du care, 2011, PUF)。

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０　件）

○取得状況（計　０　件）

〔その他〕

ホームページ
URL：
http://forum-bridge-lilies.blogspot.jp/

６．研究組織

(1)研究代表者

原山　哲　（HARAYAMA, Tetsu）
東洋大学・社会学部・教授
研究者番号：９０１５６５２１

(2)研究分担者

朝倉　京子（ASAKURA, Kyoko）
東北大学・医学（系）研究科（研究院）・教授
研究者番号：００３６００１６

青木　辰司（AOKI, Shinji）
東洋大学・社会学部・教授
研究者番号：５０１４１０７３

西野　理子（NISHINO, Michiko）
東洋大学・社会学部・教授
研究者番号：５０２５７１８５

(3) 研究協力者

フィリップ・モッセ　（MOSSE, Philippe）
フランス・労働経済社会学研究所（Laboratire d’Economie et de Sociologie du Travail）・主任研究員

マリーズ・ブーロンニュ・ガルサン（BOULONGNE-GARCIN, Maryse）
フランス・ピカルディー地方保健機構予防委員会（Comission de prevention de l’agence regionale de sante de Picardie）・委員

ファビエンヌ・ブルジェール（BRUGERE, Fabienne）
パリ第８大学（Universite Paris 8）・教授